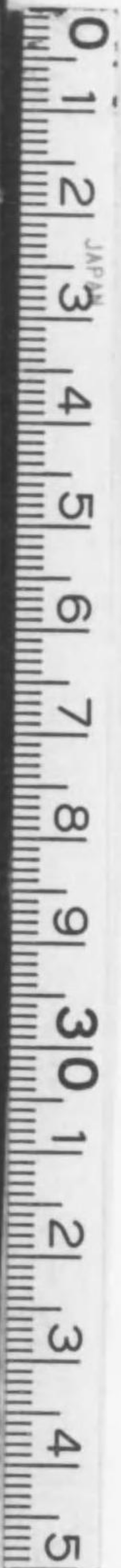


算法童子問

五卷

302  
246



始



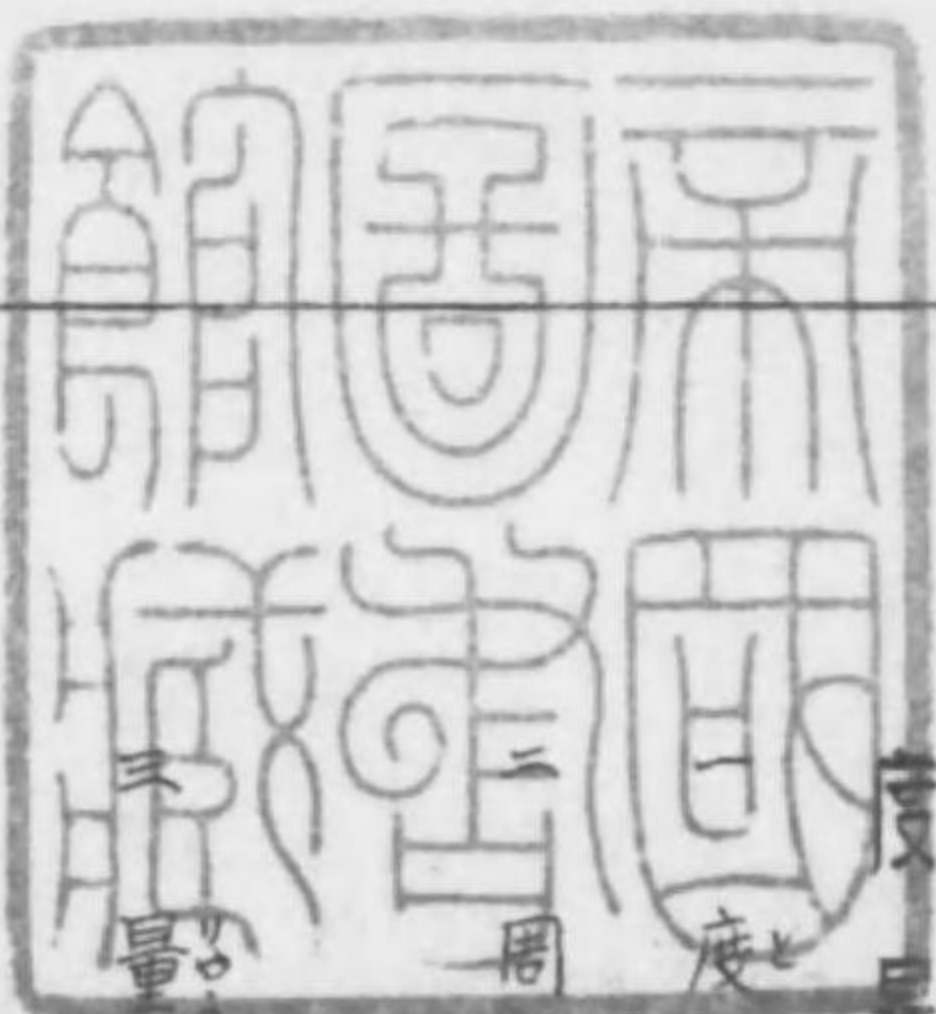
302  
6  
246

算法童子問

村井中滿著

五卷

算法童子問 卷之五 目錄



度量衡

一 度考ものとし

二 周漢尺度を求る算法

附尺四

三 量考ます

四 周量を求る算法

五 漢量を求る算法

附周繡并漢斛のび

六 衡考はかり



七 周漢秤を求る算法  
附 天平并鉄秤圖

八 總論

追加

孤背密術

附問不盡一周

算法童子問 卷之五

度量衡

それ長短を度り<sup>はか</sup>り多少を量り<sup>はか</sup>り輕重を秤る<sup>はか</sup>るに三のうつは  
ものあり一には度といふ尺ふりニには量といふ升な  
り三には衡といふ秤あり此三つのもの民のあらそひ  
をどむむ我朝において上古の事は詳ならず中古より  
唐の制度に因れりといへり上古より唐にいたりて治  
革すくなからすあるひは一方に行はれて天下に通行  
せざるありたとへば三國の時吳と蜀とは周尺を用ひ  
魏は周の一尺四分七厘を一尺として用ける類と通雅

あるひは同時にして用捨あり或は異代にして興廢ありあるひは同名異尺異名同尺ありてその間に諸説雜沓して衆口喧し度にをいては一説に周は八寸を尺とすといふ又一説に十寸を尺とすともいふ量においては度といふに三説あり秉と豆とに四説あり衡にをいては鎡といふに三説あり銚といふに二説あり後の人いづれの説に適從んやたゞ正史の載るところにしたがふべし近年徂徠先生度量考を作り其書せに行れ諸家は是にたがふ予が師家白山先生も亦與あがり今を以て見れば異議ふきにあらざるがゆへに童子の問にまかせてその大概をあらはすたゞ後人の改正を大ひぬがふ而已但たゞ累黍るいしよの術を以て律度を起す事今是を

空言に託す其いはれあればなり

① 度考 ものさし

周一尺當今尺寸寸令八釐三毫弱  
漢一尺亦同

物氏度考周漢一尺當今七寸一分九釐六毫三絲有奇

周漢の古尺といふは隋律歷志そが按ずるに漢の王莽やうぼうが銅斛尺どうこくじち建武の銅尺どうじち祖冲之そしゅうしの銅尺どうじち荀勗こんこくが晋前尺しんぜんじちといへる諸尺と同尺なりといへり周より以來せ々を歴て魏の代にいたりて終に四分餘詛くわちゆう長して周尺の正度をうしふひしかば晋の武帝の時泰始年中中書監荀勗しんけんといふ人周礼によつて其正度をもとめしむこれを晋

前尺といふとなりその後唐の魏微の輩此晋尺を本として諸代の尺を校たがふその尺の数十五等ありておのく其長短を記せり 本朝大和州法隆寺に上宮太子の旧尺あり古へより傳襲して周尺といふ此尺を考ふるに宇文氏の周より唐に至り大尺小尺二種の中の大尺といふものとして即木匠たいくの曲尺と一体同尺といふ然るに今世用ゆる曲尺は厘毫の長短ありて定準なし當時の官弁つるがますは此曲尺をもて造る故にこれに本づきて曲尺一尺の長さをもとめて定度てうどとし是を今尺と名づく上宮の旧尺にくらぶれば旧尺は今尺の九寸八分弱半分即九寸一分二七に當り今尺は旧尺の一尺〇一分六釐に當る旧尺今尺もと同尺同等ふるべきに長短

ひとしからざる事いかにと考ふるに旧尺は上宮以来人間に落ずして大尺の真度を存せり今尺は民間に流行する事年久しく世々に轉てん摹もして一分六釐の訛長をいたすものこ此古典の説に符合するとせざるとを以てその訛長せし事を知ふり已上白山先生律原發揮の意白山先生曰此旧尺は魯般ろはんが蒙より傳ふと又曰周の景王の尺と是もと明朱載堉かみしほさくが説に出で白山先生後にその無稽の説なる事を覺ると之徂徠先生も亦朱載堉が論及び漢儒かんじゆの説に従はず卓識と謂べし然れ共其説に大尺を唐朝所造といへるはいまだ深く考へざるのみ律歴志に玉尺を論じて曰後周武帝保定中ユ後因レ修倉掘地得古玉斗一以為正器一據斗造律度量衡因用此尺玉大救改

元天和一此玉尺のはじめ之此玉尺を小尺ともいふこ  
の一尺二寸を以一尺としたるを大尺といふ即ち旧尺  
なり曲尺なり是を觀此は尺の源は後周に出て唐朝  
所造にあらざ此小尺尺即玉本朝洛東泉涌寺祖師宋朝よ  
り將來すといふ其大小の尺図は律原發揮に載たり尺小  
とあり横黍尺兩尺とも周尺と云傳るは姬氏の周にはあ  
らずして其実は宇文氏の周をいふ之杜氏通典に玉尺  
を論じて曰く以今常用度量之尺當六之五又六典云  
凡度十分為寸十寸為尺一尺二寸為六尺これらの文を  
按ずるに大尺を六分にして其五を尺は小尺の一尺  
とし即玉尺泉涌寺尺也又小尺の一尺二寸を大尺の一尺と尺也  
する之又律歷志に後周玉尺實比晉前尺一尺一寸五分

八釐此止今章に古しへの尺度世に遺れり又法鏡の傳り  
たるを以てたがひに比較するに其小尺は通典の文に  
符合し其大尺は六典の文に符合す又古周尺もとむる  
算法を以て律歷志一寸五分八釐といふに驗るに適合  
すかくのごとく彼と是と依證して毫釐の差なし千載  
の下しまして百代の上を推すに算法の布くところ実測  
の合ふ所証べからざるのみ是その大概なり詳ふる事  
は別に三器概あり

③ 周漢の尺度を求むる算法

今尺は旧尺より長き事一分六釐之今尺の九寸と一百  
二十七分寸の一百〇七即九寸八分當るこれ旧尺の一尺と

そのながさ適まさに相等し故に九寸を置一百二十七を乗し一百〇七我加入して共に一千二百五十寸を得此を五因六歸玉尺は大尺の中へ六分して一千〇四十一寸六分六釐六毫不尽を得此を實數とし別に一尺一寸五分八釐隋志に晋前尺を以てを置一百二十七我乘し一千四百七十寸〇六分六釐六毫不尽を得此我法として實數を除き得る數一位を進めて今尺の數七寸〇八釐二毫九絲八忽七微〇四六六不尽となる此實に周漢一尺の眞度なり

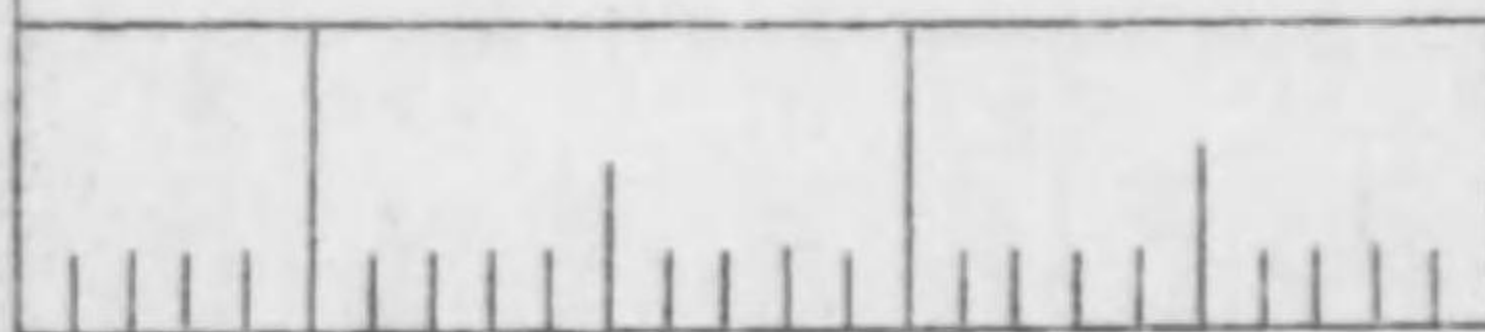
祖練先生の尺を按ずるに其說通典六典の文に拠て玉尺我大尺の八寸三分寸の一としてこれを實とし一尺一寸五分八釐を以て除けは七一九六三

有奇を得これその尺の出る所之紙上の算は合あるかごとしといへ共今其尺を作りて通典六五の説六典尺ニの説及び律尺志一尺一寸五分八釐の文に拠てたがひに長短を比較しこゝろむるにその諸説に適合せず實測において一分餘長き事を覺ふおちかるときは周尺の眞度といふべからず按ずるに祖練は今尺の訛長を察せず偶然に差失を致すもの之又三器通考に周の一尺は今の七寸八分三釐二毫に當ると云その尺いよよ長大に失し其論いよよ紛紜まぎらに渉る度を失すれば量も亦随つてたがひ有今此雙帝に大小の尺四をあらはし古典又記載する所の文を以證しその尺の長短符

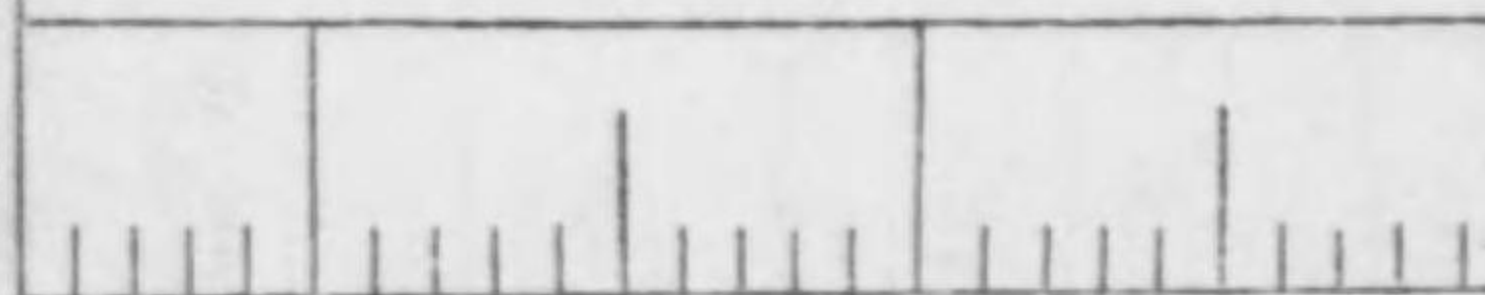




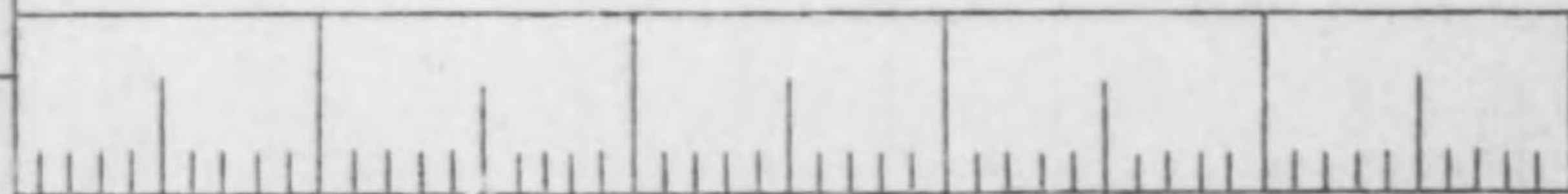
旧尺即  
唐大尺  
又名常  
用尺當  
玉尺一



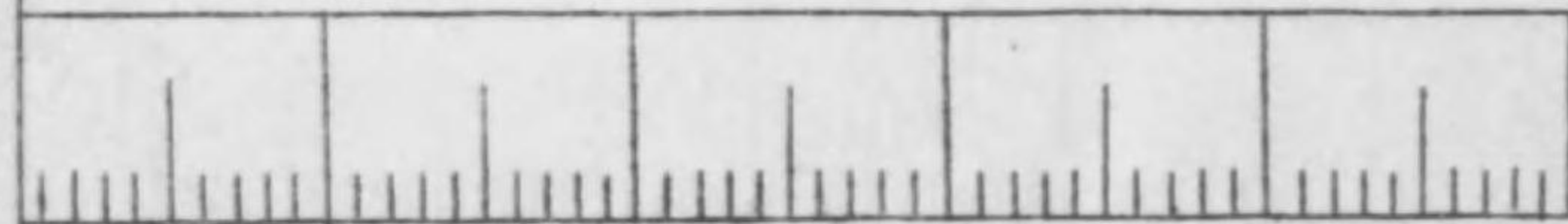
今尺即  
曲尺當  
旧尺一



宋斜尺  
當今尺  
一尺零



玉尺即  
唐小尺



新考古  
周尺即  
荀勗晉  
前尺以  
此尺一  
尺一寸

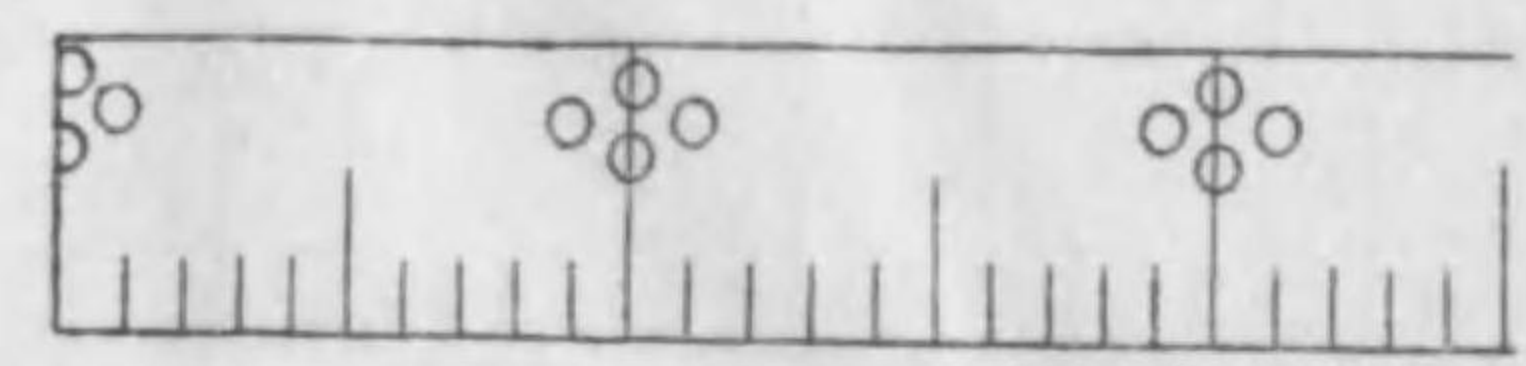
五  
七

五  
卷

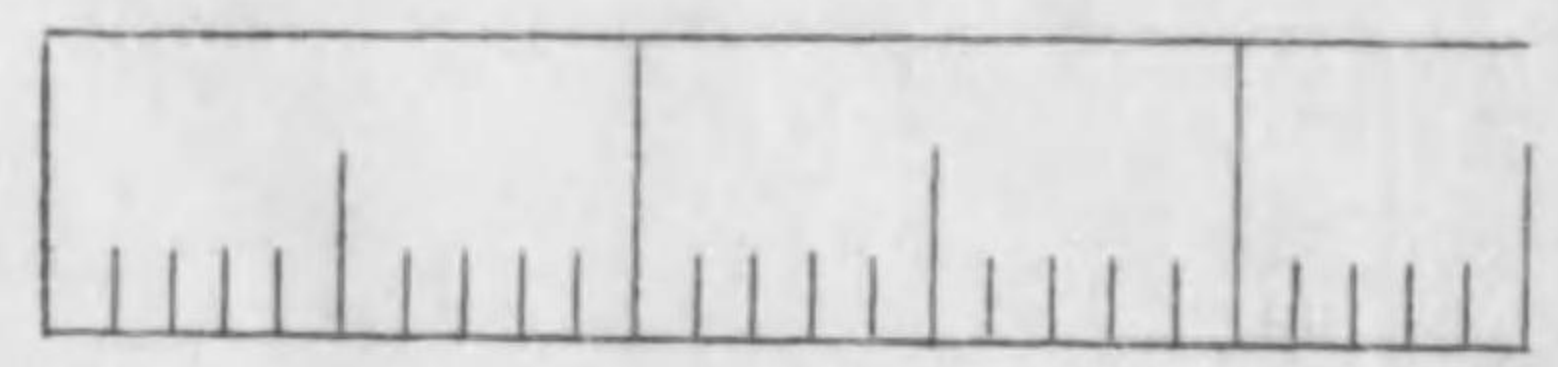
七

尺  
四

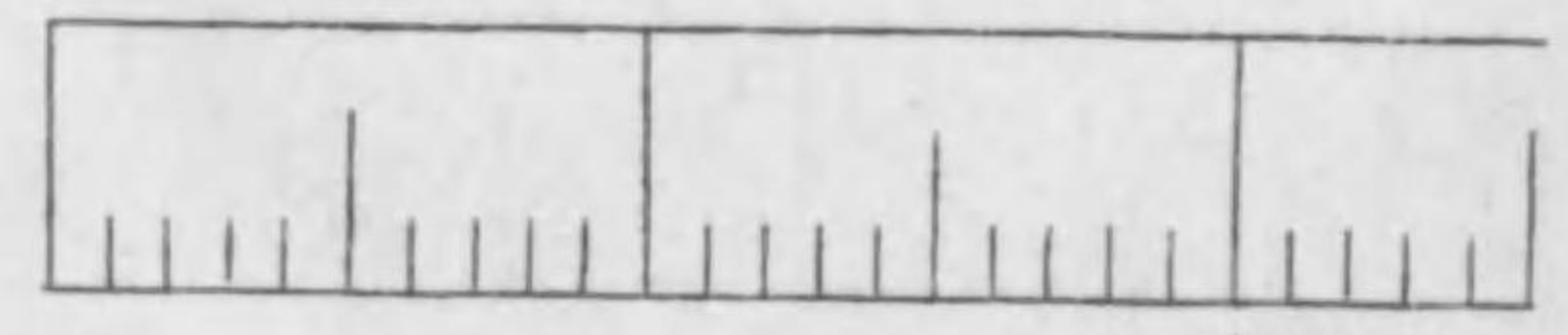
節を合せたる事を得てはじめて周漢の真度を論ずべし



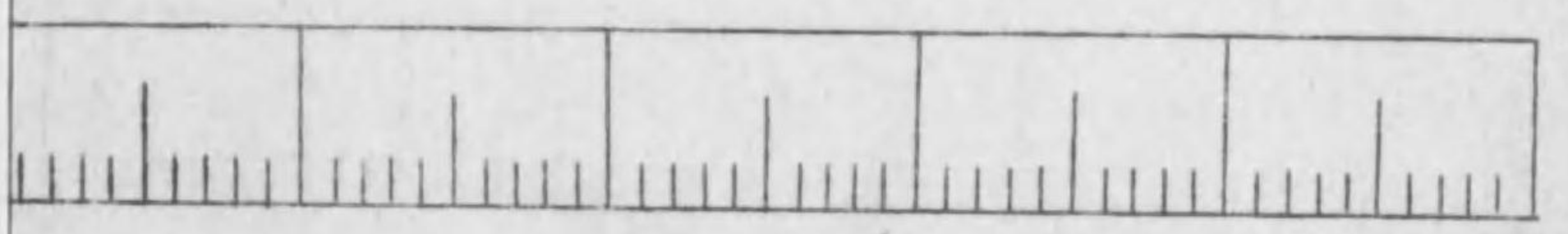
尺二寸  
今尺九  
寸八分  
弱半



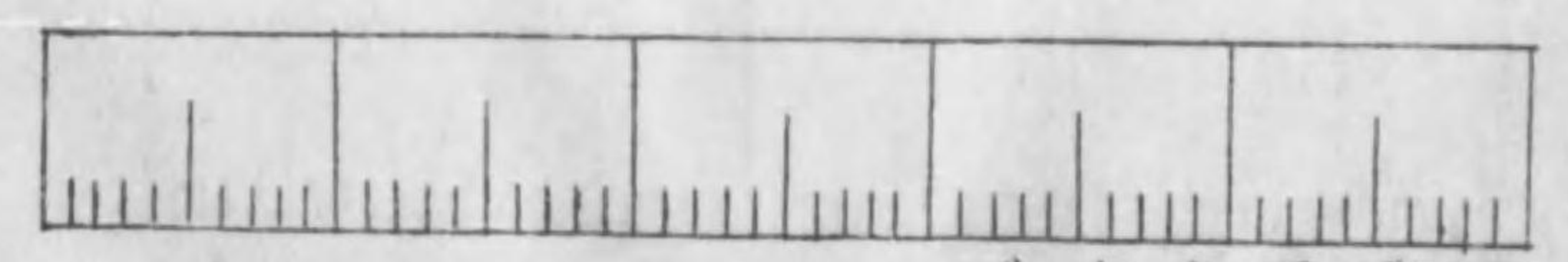
尺零一  
分六釐



二分見  
揚輝算  
法



當大尺  
六之五



五分八  
釐比玉  
尺一尺  
當今尺  
七寸零  
八釐弱

旧尺今尺宋斛尺已上三種尺  
長紙短故各圓五寸一兩之為一  
尺但恐鐮刀一過或誤分釐也

③ 量考 ます

周一升當今八勺五撮六四七二五二不盡

物氏量考周一升當今八勺九

撮八二三八九四六六七不盡

漢一升當今八勺八撮八

物氏量考漢一升當今九勺

三撮一二九四一三七不盡

周のますは周礼考工記に見へたり其かたは外を圖

にして方を内金錫を以て造る方のひろき周尺にて一尺四方六面ふり此内に粟米を實しめたるます数を一舖と云ふ故に此嘉量の名を舖と云漢の代に斛といふとおふじ漢の鄭玄注に舖は六斗四升といふより算を起す

④ 周量を求むる算法

周一尺は今ノ七寸〇八釐二毫九絲八忽七微〇四六六不尽に當る此れを再自乘して三百五十五寸三分四釐四毫二絲八忽四微不尽を得此れを周一舖の積とす六斗四升を以て除けば五寸五分五釐二毫二絲五忽四微四三九不尽を得是周一升の積之本朝升法六十四寸

八分ニ釐七毫を以て此れを除けば和量八寸五撮六四七ニ五ニ不尽を得たり

愚按に周舖の外のかたちは圓ふりといへとも其用は方の内に有経文及び注を按ずるに其實一舖といへるは方内へ受くるます目を云外圓までに實しむるにはあらざるを漢に至り方圓ともに通じて用申と見へたり周舖と異なる事漢志茂併之考ふべしさて又鄭玄注ニ圓其外者謂之脣といへるは方内の舖を除く時は四方に圓闕四ヶ所あり此れを囲む事口の脣あるに似たり然るを物氏量考ニ鄭注脣字恐即庇字誤不爾圓其外者無謂といへり此説いぶかし隋志祖冲之算術嘉量の徑寸を

以て推考ふるに周黼には鹿ふし金錫をもつて内  
方を鑄こみたるものふるべし故に仰面の円闕に  
脣ありその鹿あるは漢よりはじまる漢斛の鹿は  
別に銅を鑄て円内へ方を函にいたるものふるべ  
し脣とは異なり鹿ノ字の誤にはあらず經文に鬮  
といひ耳といふ形容の文字より脣といふなりふ  
哉高明の断を俟のみ

漢のますは漣志に見へたり其かたちは周黼に倣ひて  
圓を外にし方を函にす但し漢には内方外円共に通じ  
て其用をふすゆへに方円のさかひに銅板のへだてを  
設けたり是を鹿といふ其制は内のり一尺四方崇さ一  
尺銅箱の蓋底ふく円迎につくところ角の手の厚さ九

一釐五毫祖冲之說ハふるを内円一はいに容る祖冲之  
算術を考ふるに此漢斛の徑は周黼より大ふる事周尺  
にて二分一厘九毫之周は外のり一尺漢は内のり一尺  
ほどのちがひ有たゞし周漢同尺あり又何ゆへ漢には  
鹿を設けたるやといふに漢に至りて粟米法をはしめ  
たるゆへに周には此制かかりしや粟とはもみ米  
の事之此鹿方を過て外の圓までに粟を突しめたる茂  
一斛といふ即ち十斗之それゆへ此器の名を斛といふ  
周に黼といふがごとし鄭玄注過九釐五毫然後成斛こ  
とは九釐五毫の旁ある鹿方茂打こして外の圓内まで  
もみ米を突しめて一斛となるといふ事なるべしさて  
其もみを去て米とす此は大抵一斛のもみ四斗減じて

米六斗とふりて鹿方の内に突て鹿の外四辺の四圍は空虚とふる粟をすりて米とするを十減四と云こ此米法ふり米を粟にかへすを六加四といふ粟法ふりかやうに粟と米と四分六分にわかっ用を兼たり故に粟米法といふべし古しへ租税を納るに粟を用申俗に云もみ納め之粟は久しく貯へて損せず穀事の端とせり大抵周漢より唐の時に至りて貯米處折粟一斛輸米六斗と有こ此六を以て米法とする算法之又師古注鹿不滿之處といふは此鹿の厚さ深さの積数この漢斛の内に六もりてそれほど粟米減するたとへは今の弦かけ升に一升は弦の積ほど米減ず此共一升とするがごとし是を不滿の處といふふるべし周は一斛を四分して

區といふ一區を四分して豆といふ一豆を四分して升といふ漢は一斛を十分して斗と云ふ一斗を十分して升といふ一升を十分して合といふ後世宋よりすへつかたは五斗を一斛とし十斗成一石とすといへり

⑤ 漢量を求むる算法

周尺再自乘三百五十五寸三分四釐四毫二絲八忽四微  
不尽を實數とし別に方一尺を再自乘して千寸を得漢  
斛の積一千六百二十寸を以て是れ除けば六分一釐七  
毫二絲八忽三微九五不尽を得こ此を法とし實數を除  
けば五百七十五寸六分五釐七毫七絲八忽七微不尽を  
得二位を退いて漢一升の積とす本朝の升法六十四寸

八分二厘七毫をもつて漢一升の積を除けば和量八勺八撮七九九零七不尽を得尾数を収めて八勺八撮八とす

王愨云漢二斗七升當今五升四合陳言云以詔與一升得漢五升揚輝正斛法云方三寸立方積二十七寸受粟一升とあり今宋揚輝斛尺尺四に見を以て漢量を驗むるに王愨陳云が説と符合せり此徒ハゴ此も宋人にして當時の尺四をあらはし斛法を論ずる事詳ふり又何ぞうたがはんや其餘宇文氏の玉量隋唐三倍量等繁多ふり故に之れを略す

本朝の古升は唐制を京て内方五寸深二寸五分唐の大尺量即田にして実積六十二寸半此一升は適に唐の

二升半に當るとなり唐一斗の積は二百五十寸と是を四分にして本朝一升の積とするも周輔を四分にする古法に依り似たり此古升せに行ふ事年久し呼びて京升といふ今通行の升は古升の方五寸に一分を減じて四寸九分とし深二寸五分に二分を加へて二寸七分とす其積六十四寸八分二毫七毫當時江戸升と呼けるを後に又京升といふとふる元和年中より行ふ事毛利重能帰除滋藤に見へたり

周輔仰面図



按：傍一釐八毫八忽に一釐八毫六秒九忽有奇ふ

周孔梨<sup>リッ</sup>氏<sup>シ</sup>鑄深尺内  
方尺而圓其外其  
一釐情志去粗冲之  
以算術考之積凡一  
千五百六十二寸半  
方尺而圓其外其傍  
一釐八毫其徑一尺  
四寸一分四毫七秒  
二忽有奇深尺即古  
斛之別也

り兩傍合て三釐七毫三秒八忽を周鑄、外徑一尺四寸一分四毫二毫一秒の内を減ずれば餘一尺四寸一分零四毫七秒二忽を得、此周鑄の内徑ふり志の文と合へり

周鑄

外徑一尺四寸一分四毫二毫一秒 即漢内  
内徑一尺四寸一分零四毫七秒二忽

漢斛仰面圖



一毫四毫有奇、欽術不精之所致也  
 按祖冲之以旋て鹿旁を一分〇九毫有奇とす此  
 は實に一分〇九毫九秒之兩旁合て二分一毫九毫

隋志載漢斛銘云律嘉  
 量斛方尺而圓其外鹿  
 旁九毫五毫日界百六  
 十二寸深尺積一千六  
 百二十寸容十斗祖冲  
 之以四率考之此斛當  
 徑一尺四寸三分六毫  
 一毫九秒二忽鹿旁一  
 分九毫有奇、欽術旁少

八秒を漢斛の内徑一尺四寸三分六毫一毫九秒の  
 内を減ずれば餘り一尺四寸一分四毫二毫一秒を  
 得これ漢斛内方の斜徑之志の文と合り以上周尺  
 を以て言〇又按ずるに、欽術徑率九十七周率  
 三百零六祖冲之算術徑率一百一十三周率三百五  
 十五列は疎祖は密なり

漢斛

内徑一尺四寸三分六毫一毫九秒二忽  
 鹿斜一尺四寸一分四毫二毫一秒  
 即周外円徑

⑥ 衡考 はかり

周一兩當今二錢九分六毫二毫九絲六忽不盡  
 漢一兩亦同



物氏衡  
考亦同

周には銖しゆ兩りやう徒た拳けん銖しゆ斤しん衡へい秤しやう鈞こん石せき銀ぎんの十二名ありと小  
爾雅じやうに見へたり漢志かんしに權者銖兩斤鈞石也けんしやうしんこんせき中十二銖兩  
之為兩二十四銖為兩十六兩為斤三十斤為鈞四鈞為石  
と見へたり又隋志ずいしに周の玉秤の四兩は當古稱四兩半  
といふ周八字文氏の周ふり唐志たうしに武德四年鑄開元通  
宝徑八分重二銖四綮しん積十錢しん重一兩じゆうこれらの文によつ  
て周漢の斤兩を推求むべし

⑦ 周漢の古秤を求むる算法

唐一兩の數十錢を置四因三得すれば十三錢三分三釐

三毫三絲不尽を得こ此を實數とし四半を法として實  
を除けば周漢一兩の數ニ錢九分六釐二毫九絲六忽不  
尽を得たり

通雅つうがに沈存中程大昌云一斤為今五兩當時五兩而少

一兩為今三錢當時三錢而少又陳言三因方論云六銖

錢四箇即二十四朱なりして比開元錢三箇重と云

錢一箇の重さこれらの説を以て隋志の文以参考

すればいよしへの一兩は今の三匁に近き事ます

ます信すべし

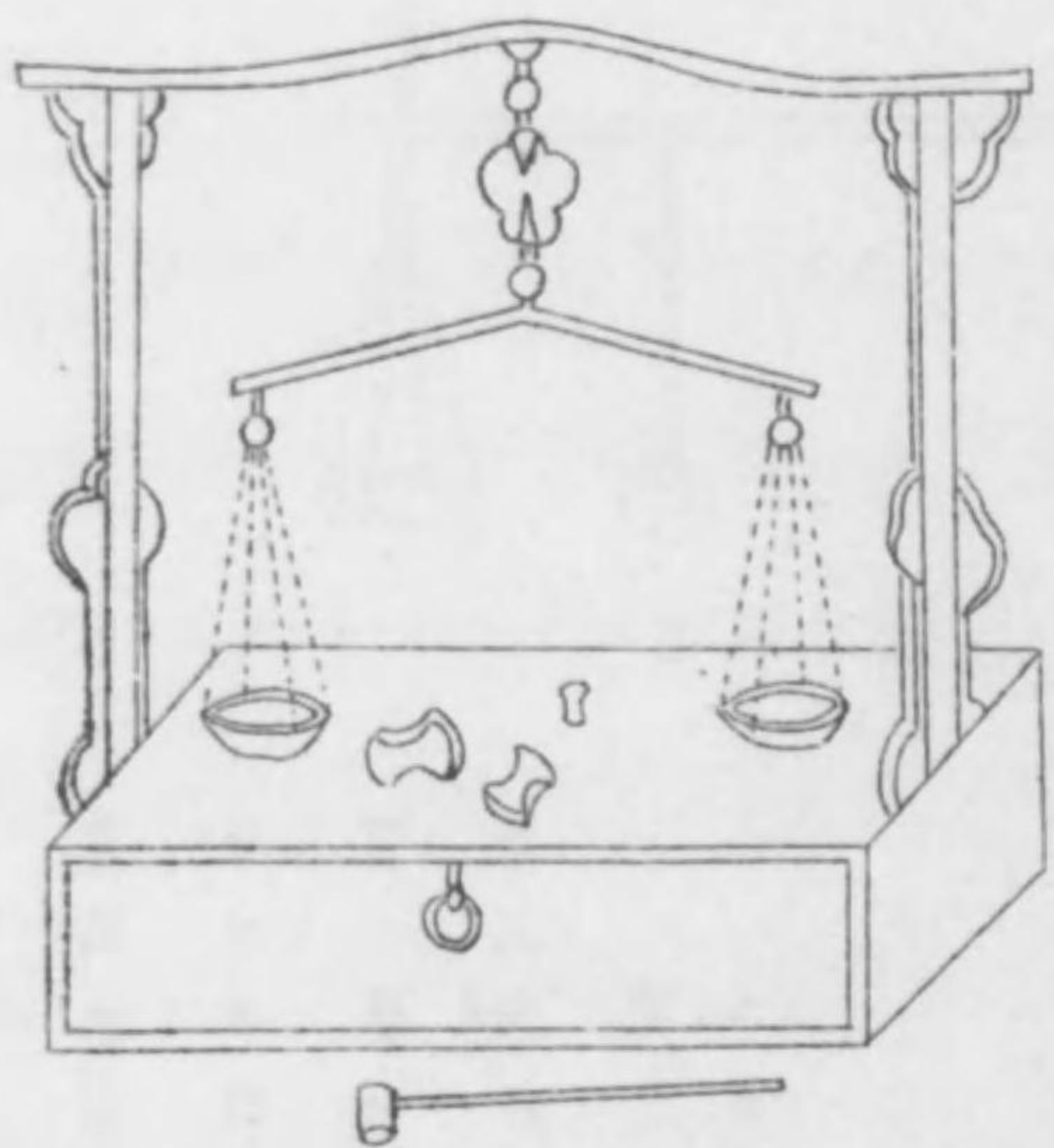
杜氏通典とに隋前代三兩當今一兩といへる前代宇文  
周の時をいふ此時玉秤といへる有今の三錢三分三釐  
三毫不尽を此秤の一兩とすこ此を小秤といふ此三兩

は隋唐の一兩にして今の十錢目に當る此を大秤と云傳へて趙宋に入て廣秤と云本朝法馬は十錢目を一兩とす是隋唐大秤の制を棄て今に至るまで變ぜず又一錢目といふは唐志に開元錢十錢を積で重さ一兩といふよりはじまると云

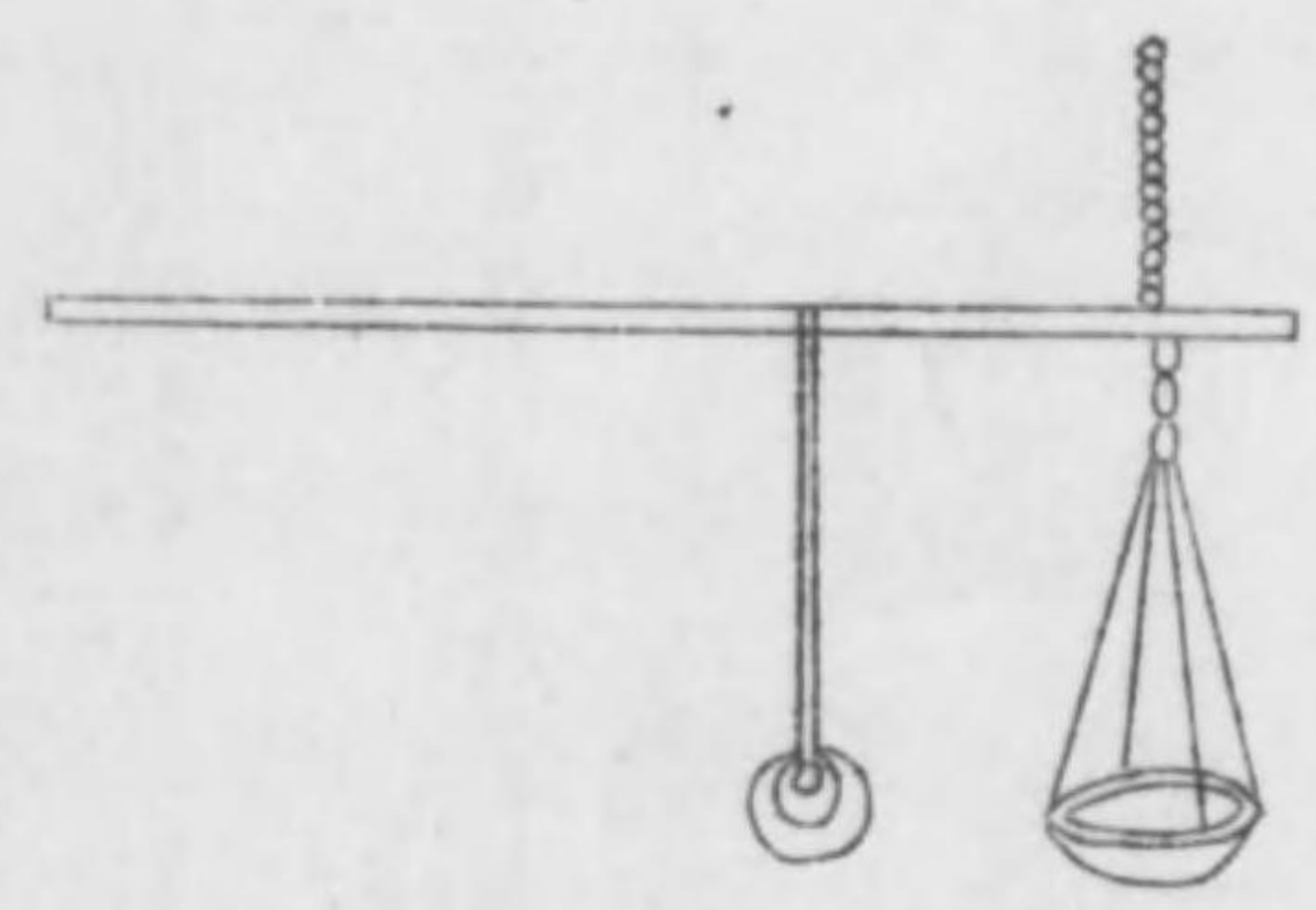
天平圖

其制以銅為梁又有兩銅盤以銅索懸於梁之兩端梁之間上下各々有銅笋笋相對則輕重各々等不然則互有所歎矣

見于明王兄  
明三才圖會



銖秤圖



皇祐新集圖有銖秤其因幹上  
分二十四銖為一兩止一兩有  
星一繫一盤如民間金銀等子  
者其鍾形如環

見于宋程通  
三器圖義

八 總論

後周の武帝保定元年辛巳五月に倉を修し地を掘りて  
古玉斗を得たり此時すでに古度を失せしかば此  
を姫周の正器とおもひその玉斗に扱て尺を造るこれ  
を玉尺といふその玉尺に二寸を加へて大尺といふよ  
り玉尺を小尺と云又升を造りて玉量といふその玉量  
を三双倍して大量といふより玉量を小量と云又秤を  
つくる是を玉秤といふ其玉秤を三双倍として大秤と  
云より玉秤を小秤と云かのごとく大小とも用ゐる事  
は後周よりはじまりて隋唐の二代に此を行ふと之  
本朝のむかしも其制をうけて度量衡をのく大小の  
二種を用ひしにや延喜式に見へたり後世には大のみ

行はれて小は聞く事ふし度衡の二つは唐の遺風を存  
 せり量に至ては大小古法に遠ふ漢秤は銖兩斤鈞石と  
 て五つのおもり有その形は漢志を採ずるに環のごと  
 く圓まことかにして中に穴あり今の天平てんひんに法馬ほうまを用申るごと  
 く五權ごけんをたがひに取かへて輕重を忘るとふり又今の  
 等子はかりの勢上せじょうに星をもりて銚さし一つをもつて前後へ往來  
 する事は既に唐の時に行ふと見へたり唐の包何ほうかが秤  
 に類以る金秤きんばら因よ君贈きんぞう別離べつり鈞懸きんげん新月しんげつ此術直象星隨とい  
 へり又陳佑ちんゆうか術ノ賦ありみな今の等子はかりと同じ又分釐  
 毫絲忽はうしこくはとと尺度しちどの名ふり後せは秤目しやうめの名となれり  
 石いしはもと秤目しやうめの名と後せは量目りやうめの名とふれり明董めいとう穀こく  
 が説せつに今の米十斗まいじゅうとの重さ四鈞あり四鈞を石いしとする故

に一石といふと之然れ共既に五經算術に見へたれは  
 唐より以前の事ふり

追加

孤背密術

今有圓闊弦八寸矢二寸問孤背幾何

答曰孤背九寸二分七釐二毫九絲弱半

術弦界七寸十矢界十段一徑弦相乘十一百段

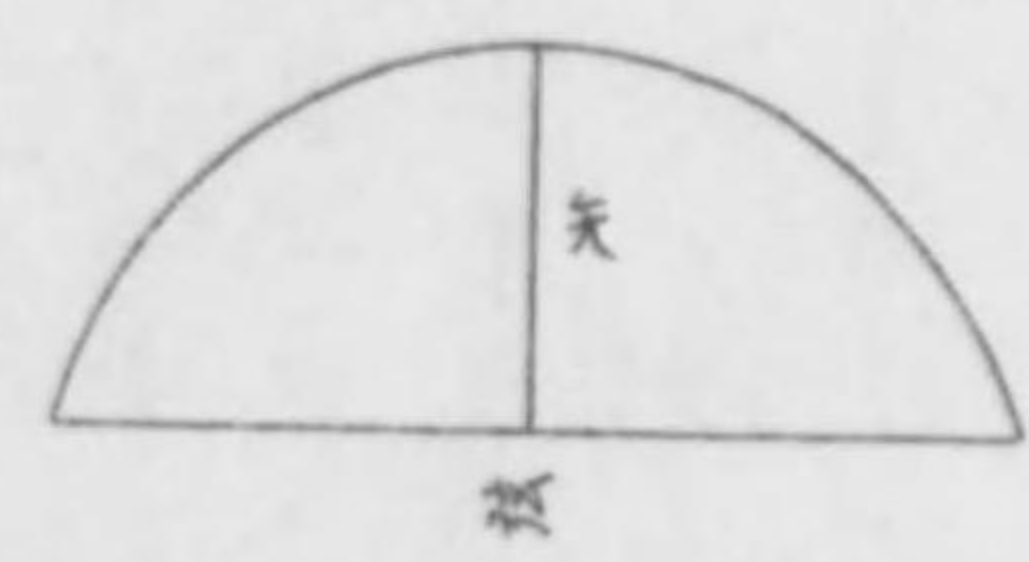
三宗相供以周率十五五乘之為實倍矢以

減法餘一百一十六之加徑十五段一以徑率

十三乘之為法除實得孤背

此術得真數五位

周率四率の其はじめを考ふるに宋の祖冲之といふ人密法を開き円徑を一丈としてその円周三丈



一尺四寸一分五釐九毫二抄七忽を盈數とし又三丈一尺四寸一分五釐九毫二抄六忽を開數とす盈はあまるし開はたらぬ也円周真數不尽は七忽と六忽との間にありと見て円徑一百一十三ふれば其円周は三百五十五とす是を密率と云又円率七ふれば其円周は二十二とす是を約率といふ著す所の書を綴術と云隋志冲之が子暉子もつはら或術を明す東術すべて綴術といふふり通方以智

附問

不盡一周

假令置一算以法數若干除之遂為不盡一周乃若以三七位

也為中一問得其位數術上

此算題既見于彥循先生竿頭算法京人著開承尾張人著算體各、設答術解之當時視以為是終置不再論予退閱之關美涉于誕算體失于約均之不得其辭惜哉先生沒偶、失其稿予亦拙且先笑庶四方博雅幸有續狗尾可謂藝苑盛事矣故今復標舊題即其一端以備請益之雅云

今問二位一周者得其法數術如何

答曰列于左

草去列九箇依自約術得三別列一箇以九除之止初得商一不盡一

九	九	九	九	九	九	九	九	實
商一	商一	商一	商一	商一	商一	商一	商一	法
共加九八	共加八七	共加七六	共加六五	共加五四	共加四三	共加三二	共加二一	
還原	一一二五	無約數	一五	一八	二二五	三	四五	商

所得各商為法列一箇為實際之得各二位一周

今問三位一周者得<sub>二</sub>其法數<sub>一</sub>術如何<sub>上</sub>

答曰列<sub>二</sub>千<sub>一</sub>左<sub>一</sub>

草去列<sub>レ</sub>九<sub>二</sub>位<sub>一</sub>即九依<sub>二</sub>自約術<sub>一</sub>得<sub>二</sub>三九<sub>一</sub>別列<sub>二</sub>一箇<sub>一</sub>以<sub>二</sub>九<sub>一</sub>十九除<sub>レ</sub>之<sub>位<sub>止<sub>初</sub>得<sub>盡<sub>〇</sub>一<sub>不</sub></sub></sub></sub>

九九	九九	九九	九九	九九	九九	實
商一	商一	商一	商一	商一	商一	法
共加 七六	共加 六五	共加 五四	共加 四三	共加 三二	共加 二一	
無約數	一六五	一九八	二四七五	三三	四九五	商

此末至<sub>二</sub>法九十九<sub>一</sub>  
還<sub>レ</sub>原<sub>姑<sub>從<sub>省<sub>略</sub></sub></sub></sub>

九九	九九	九九	九九	九九	九九
商一	商一	商一	商一	商一	商一
共加 十三	共加 十二	共加 十一	共加 十	共加 九	共加 八
無約數	八二五	九 <sub>出<sub>于<sub>二</sub>位<sub>一</sub></sub>周<sub>故<sub>省<sub>之</sub></sub></sub></sub>	還 <sub>レ</sub> 原	一一	一二三七五

所得各商為<sub>レ</sub>法列<sub>二</sub>一箇<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>實除<sub>レ</sub>之得<sub>各<sub>レ</sub>三位一周<sub>一</sub></sub>  
凡二位一周者以<sub>二</sub>九段<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>限三位一周者九十九段為<sub>レ</sub>限四位一周者九百九十九段為<sub>レ</sub>限餘做<sub>レ</sub>此

算法童子問 卷五 終

題 算法童子問 後

中漸村井先生は夙に道藝に志し翰墨に心を馳せ九章  
は其諸餘のみ人となり沈黙和遜にして聞達を貪らず  
時俗に隨て自適を業しむ當時平安に名を釣利を射る  
輩に異なり此再子は唐の明算料に倣ひ見戲に託して  
童子を尊くこひぬがはくは九章の學に進まん事を因  
て奥旨を近喻ちかよひに藏かくし玄理を鄙諺ひがんに蘊くむをば玉石相  
混するがごとし覽る人能よく此を崑岡こんがうに探みおは永く  
抵鶴村とどくせんに游嬉すべしその末度量衡に及んでは突に國  
家の典律なり時制の損益を知らずんはあるべからず



今盡く浩繁を対要領を撮み國字を以て賤し易からしむたゞ童子の爲のみならず老成も亦益あり況んや儒者大率算の織機を知らざるをやこ此五種算経を作為せる所以なり曾て聞向に物徂徠度量考を著して世に行ふ諸家競て信従す志か此共其説失考多く唐宋に至ては甚しと先生こゝに志ありて尚度量微あり其攷證する所尤世に功なきよしもあらず此末冊はその嚆矢なりといふ

癸卯之冬

崎陽

平

千

里

識

天明四年版本に依り謄写複製す  
発行人

302  
5  
246

昭和十一年四月二十日印刷  
昭和十一年四月廿四日発行

東京市目黒區月丸町一四五番地  
發行所 澤村 寛

印刷所

印刷所 古典数学書院  
印刷部

東京市目黒區月丸町百四十五番地  
發行所 古典数学書院

302  
246

終

